

La Negreco

2004.6

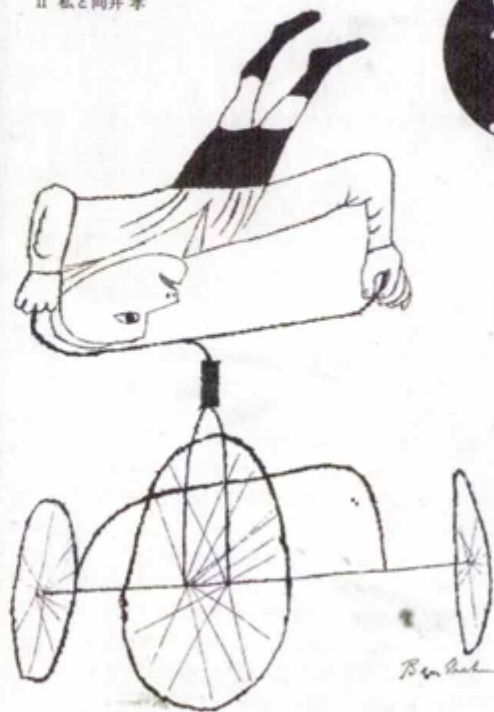


特集 向井孝

I 8.6 前後のこと

II 私と向井孝

n-ro.
10



終刊号

追想 ムカイコウさん

相京範昭

死者は語らない。だが、死が彼の存在を年月の波間に消してしまつたとしても、その胸裡にこめられた限りない怨念は、いつか必ずよみがえらないことがあるうか。明治・大正・昭和を通じて、アナキズム運動は何より国家権力と対峙して譲らぬものであった。それゆえにこそまた、大逆事件をはじめとする容赦のないむきだしの弾圧が、そのうえに徹底して加えられてきた。

そしてアナキストたちは、自己を選んだ無名と孤独の道を歩みつつ、いつも、ただ自らの黒い死によつて、未来へとわたしをひたすら導いたのだった。

むくわれることなく、知られることなく、ついに獄死し、狂死し、自殺し、あるいは行方を絶ち、病没していった人たち——そして、今は誰も語らなくなつてしまつたその人たち——。

逸見吉三著『慕情なきアナキスト像』(三一書房、一九七

したからである。私はそのための〈捨て身〉となつて時給一貫、五〇年の歳月をただ労働運動一筋に全生涯をかけた。今日なお、その一兵卒としてあることに何の悔いも持っていない」とあり、「ここに出版できたのは、向井孝氏の勤めにより、私の記憶をたどりつつ、向井氏の補筆によつて聞き書きとして成文化され」たからと書かれている。わたしは向井さんの聞き書きがきつかけとなり、労働運動一筋の江西氏の生涯がここにまとめられ、それに協力できた、その時点ではそう思っていた。

ところが今回、ふうさんから「慕情なきアナキスト像」発刊のいきさつが書かれている向井さんの文章、「イオム」一九四号の付録が送られてきた。執筆時期は一九七六年九月と推測できる。そこには、その『江西—三自伝』に向井さんの文章を取録するにあたり、S氏が強引に、向井さんを無視して進められた経緯が書かれてあった。だから、S氏が書いたその「あとがき」(本来は当然江西氏本人が書くべきだが、S氏が書いて江西氏の確認を得た)には、協力者としてわたしの名前があつても向井さんの労をねぎらう言葉はなかった。

そして、「慕情なきアナキスト像」発刊に際し、向井さんが出した問い合わせに対する、S氏からの「無礼でひどい」手紙が所々に引用されていた。向井さんは「ことの成行き上S氏への非難ともどられかねないが、けんかする気も改めて権利を要求する気も毛頭ない。ただハレンチ事件

六年八月(五日発刊)の書き出しである。これが向井孝さんとの出会いだった。文末に「向井孝君の大きな助力があつたことを書き加えておく」とあるが、その後の向井さんの書かれたものを読んでいけば、これが「逸見吉三の名前で書かれた向井さんの文章である」ことは明らかである。しかし、今後、何かの形でこの文章が引用されるとき、これは「逸見吉三著」となつてしまうので、この際、そのことを知る当事者の一人としてはつきりさせておきたい。

一九七三年の二月、「リベルテール」の印刷などをしてたいたバルカン社で学生運動の余韻の中でバイトをしていたわたしは、仕事を持ってきたS氏(後で出てくる向井さんの通信に習つてイニシャルにする)の本業である馬の仕事をやめる約束で会社を移った。しかし、馬の世界だけではなく、彼の個人的な仕事もすることになった。そのなかのひとつに『江西—三自伝』の制作なども含まれていた。その自伝は向井さんが書いた『江西—三とその時代』と江西氏が関わった争議の記録でできている。わたしは印刷所バルカン社へ通い、校正やら出版に向けての作業を行なった。そして、戦前のアナ系組織「自協」の争議資料などを整理して加え、まとめた。

その「まえがき」には「私は逆境の中で革命への黎明を希求し、自然の道として労働運動に参加したのは、私の胸深く根ざしていた社会への不平等と矛盾に対する反逆心から出発し、正しい者が尊重される社会を築くことを念願と

に関わり合ったことを追ひ、今後一切はこの一文だけでかわりを断りたい」といい、三一書房で発行される前「現代の眼」の版元・現代評論社から向井さんと逸見氏との共著として出版される契約があつたが、逸見氏の作業が進まず取り消された経緯が記されている。そしてS氏の逸見氏や江西氏への配慮を口にしての義理人情も仁義も任侠もない「無礼でひどい」手紙の井に対して事情説明がなされている。「読み返して我ながらめくるみにはまった感じ」「もうヤケクソ」「ああイヤダ。もうやめる」と随所にうめき声に近い言葉が噴出してた。そして結局、向井さんを無視しての三一書房からの出版ということになった。向井さんには出来上がった本の一冊の贈呈もなかった……。

今回、その「イオム」付録が送られてきた際、ふうさん

からこういうメールも届いた。
向井さんのイオム、郵便つきましたか?
イオムを読んで、またあの時のことを思い出して、昨日は夜中に何度も眼がさめてないでいました。わたしは向井さんのこととなるとムキになつてしまふんや。向井さんの誠実や好意がこんな結果になつてしまつてることにはほんとうに許せない、という思いです。

(略) わたしは、アナにはピンからキリまでいて、それがアナやと思つてる。

わたしは今、およそ三〇年前のことだが、その片棒を担いだという何ともいえない気分になっている。事情の断片は、発行の後たしかに耳に入ってきたわけでもない。しかし、わたしはそのころ八木秋子のことで無我夢中だった。一九七五年に八〇歳の八木あきさんに初めて会い、「標榜なきアナキスト像」が発刊された頃は彼女を訪ねることが多くなっていた。その暮れには老人ホーム入り、翌七七年一月には老人ホームからの脱走。そのこともあって三月から八木秋子の通信「あるはなく」の発行を発意し、七七年七月からは通信「あるはなく」を、七八年からは八木秋子著作集を自主出版し、その動きはいろんなマスコミに報道された。

その間、S氏のところで仕事をしつつ、わたしは与えられたほとんどの時間を、八木秋子の通信と著作集の発行を進めること、そして、独り老人ホームに入っている生身身の彼女の尊厳を守ることに費やしていた。いまあの頃のことを思うと、向井さんのことについてはどう書いても言い訳けじみしてしまうのでイヤになるが、仕方がない。聞き直りかもしれないけど、三〇歳のわたしはとにかくやり抜くしかなかった。八十歳の八木秋子の老いと競争するように突っ走っていたからだ。

そんな事情もあって向井さんとの出会いはなかった。向井さんと初めてゆつくりお会いしたのは、八木秋子が亡くなった八三年の一〇月だった。一九三〇年代初期の農村育りを断ち切っていた「まあしやあない」ということだろう。こんなことを書くとき、またふうさんを泣かせてしまふのかな、でもそんな気がする。

ところで、冒頭に挙げた文章がわたし自身が持つにいたった「アナキスト像」に少なからぬ影響を与えたことは間違いない。今も深く共感するからである。三〇年あまりの時を経て、例の「近代日本社会運動史人物大事典」編集委員会会報の特別付録「忘れ得ぬ事ども」のお粗末な萩原晋太郎の文章への抗議。その後の「日本アナキズム運動人名事典」に対するわたしのこたわりの世界がここにある。もちろんそれは、当時わたし自身がノンセクトラジカルの無名性こそ全共闘運動の原動力だったと考えていたことも無関係ではない。七〇年安保がそれまでの党派性を一挙に越え、自由民権運動の歴史や女性史などの発掘作業を重視する方向に進み、そのことがアナキズムの再評価とも通じていたから、時代性といっても良いかもしれない。

ふうさんから「わたしと向井さん」というようなタイトルで書いて欲しいという依頼の文面に、向井さんの「メソ」死者について」が添えてあった。「死者が語り損ね、語らなかつたことを探し、死者を蘇らせなければならぬことをようやく知る。九九年一月二日」と書かれてあった。「ようやく知る」と謙遜されているが、向井さんは、ずっと、ずっと、死者を、とりわけ無名の死者たちを蘇らすようにしていたのだと思う。

年社運動において、八木さんの同志だった名古屋の星野幸二さん、広島のと佐田芳雄さん、信州の南沢繁松さん、東京の山田彰さん、そして、大島英三郎さん、茨城の別所孝三さん、伊勢の安田理貴子さん、向井さんがそこに集まったメンバーだった。亡くなった八木さんの追善供養を木曾福島の長福寺でおこない、泊まった宿でみなさんから八木さんのことを時間の許す限り聞き続けた。向井さんも和佐田さんから大阪アナキスト青年連盟にいた人たちのことを聞いていた。

二度目が一九八六年五月の伊勢泊瀬浦での集まりだった。これも「星野さんと和佐田さんから八木秋子さんのことを聞く」ために集まった。わたしは八木秋子の当時の心情などをかなり綿密にうかがうことを目的としていたので、わたしたちとは別に、向井さんは理貴さんや宮本三郎さんたちと別室で話をしていて時間が多かつたように記憶している。

このように、わたしがじつじつ向井さんと会った回数はいずれも多くない。そして、お会いした時もS氏のところで仕事をしているにもかかわらず、その話題を互いにしなかつた。かえって、八木さんが亡くなってから発行していた「バシナ」に書き綴りだ川柳作家児玉はるさんの聞き書きを、ほめてくださったこともあった。あの「イオム」に書かれているように、逸見さんや江西さんのことについて向井さんは触れなかった。あの件については一切聞

では、なぜ無名の人の生きざまにこんなわたしたちは思いを寄せるのだろうか。向井さんの追悼からちよつとはみ出てしまふかも知れないが、向井さんが語ったことではないかと思ひ、わたしが考えていることを少し書きたい。

わたし自身が八木秋子や児玉はるさんを伝えようとしたのは「無名の人を有名にしよう」としたわけではない。八木さんや児玉さんのことを私有するのは申し訳ない。そういう人がいたということを、歴史に刻む使命がわたしに与えられたのだと、ずっと思ってきた。そうすれば、彼女たちの魅力がいつかまた蘇ると思つたからだ。

「葛洪」(Kaku Kō)という人物がいる。その著書「抱朴子」はこう始まる。「わたし葛洪は、生まれつきとびぬけた才があるわけでもないうに、たまたま老子のいふゆる無為の道が好きだった。だから、たとえ青空をしのいで飛べるほどの強い翼、風を追いつくほどの速い足があつたとしても、やはりミソサザイの群れのなかに強い翼をたたみ、びつこの驢馬の仲間として速い足をかくしていたい——」

わたしは全く同意する。草莽・無名をあえて獲得するのである。ひたすら下降する人かということだ。そういつたアナキズムを精神の底において活動した人たちがいる。たとえば、近藤憲二の著書名は「私の見た日本アナキズム運動史」「一無政府主義者の回想」、連れ合いの近藤真

柄さんは「わたしの回想」。どれも自分の知っている範囲でのという限定付きであり、控え目である。また、手元にもたまたまあったのでバラバラめくっていたらこんな文章にも出会った。それは小松隆二さんが名古屋の第一五回橋宗一少年の墓前祭記念講演冊子「大杉栄没後六十六年雑感」で新居格に触れ、「いまでも私を引き付けるのは、大よりも小、急ぐよりもゆっくり、大声で叫んだり、目立つ形で書いたりするよりも、じっくり訴え、そつと書くことを好んだ地道な生き方・考え方」であると書いている。小松さんも戦前の多くのアナキストを知る数少ない方。だから「戦前アナの面影」を擁している。控え目な彼らは「私」を押し出すのではなく、「私」をそつと添えるのである。ではそれは、東洋の老荘思想に見られる品位かといえは一概にそういうわけでもない。かのクロボトキンも『一革命家の思い出』となっている。これはやはり「アナキズムはたんなる行動の形式や自由社会に関する思想以上の、自然と社会に関する哲学の一部である」（クロボトキン「ある革命家の手記」より）ということだろうか。その人たちは、無名であろうとなかろうと、「自負」を持って生きて来たという潔さがある。わたしはその人たちを尊敬する。一方、アナキズムをどう標榜しようが、そうでない人はきらいだ。

最後にもう一度、向井さんが言う「死者」に寄せる心情を考えてみたい。たとえば憤怒に満ちた銘がある橋宗一少年の墓、箱根林泉寺裏の共同墓地の内山愚堂の小さな墓石、

伊豆の久板卯之助の終焉の地で、わたしたちは彼らの墓前で鎮ずき、その死をこころに刻む。そのようなころの持ち様をずっと地下水のように保ち続けている。それは、大正期に民謡童謡作家として活躍した野口雨情について松岡正剛が書いていることにも通じている。「日本のアナキズムには幸徳秋水・荒畑寒村・大杉栄から石川三四郎・辻潤・秋山清におよぶ心情には、私がかれまでのべてきた日本的な多様な一途がこもっている」（『日本流』松岡正朝日新聞社）。わたしもそう思う。

すでに三年前の「黒」に書いたが、わたしが知るアナキストの面影には、「無邪気」「正義」「一途」「頑固」、そして「諦観」の雰囲気はどこか漂っている。そして、彼らが立ち去ったあとには「哀愁」と名づけるしかない、何んともいいがたい気配が残る。もちろん「哀」は悲しみではなく、しみじみとした趣があることで、それを慕う気持ちが残るということである。幸いなことにわたしたちは、その人たちの立ち振る舞いや言動を間近に見てきた。その包み込むような「景色」の中で生かされ、忘れ物を取りに行くように新たに生きる勇氣を自覚しているのだ。

だから、向井さんもそうだ。ムカイコウさんはいつも、わたしを包む気配の中にいる。「まあ一杯」と言い、かたむけた盃にだまって酒をついでくれるはずだ。わたしはそう思う。